

1 アンケート分析結果

四段階（1～4）で問うたもののうち、肯定的な回答（3・4）と回答したものを合算した数値を掲載し、比較しています。被験者は、令和3年度237名、令和4年度202名です。

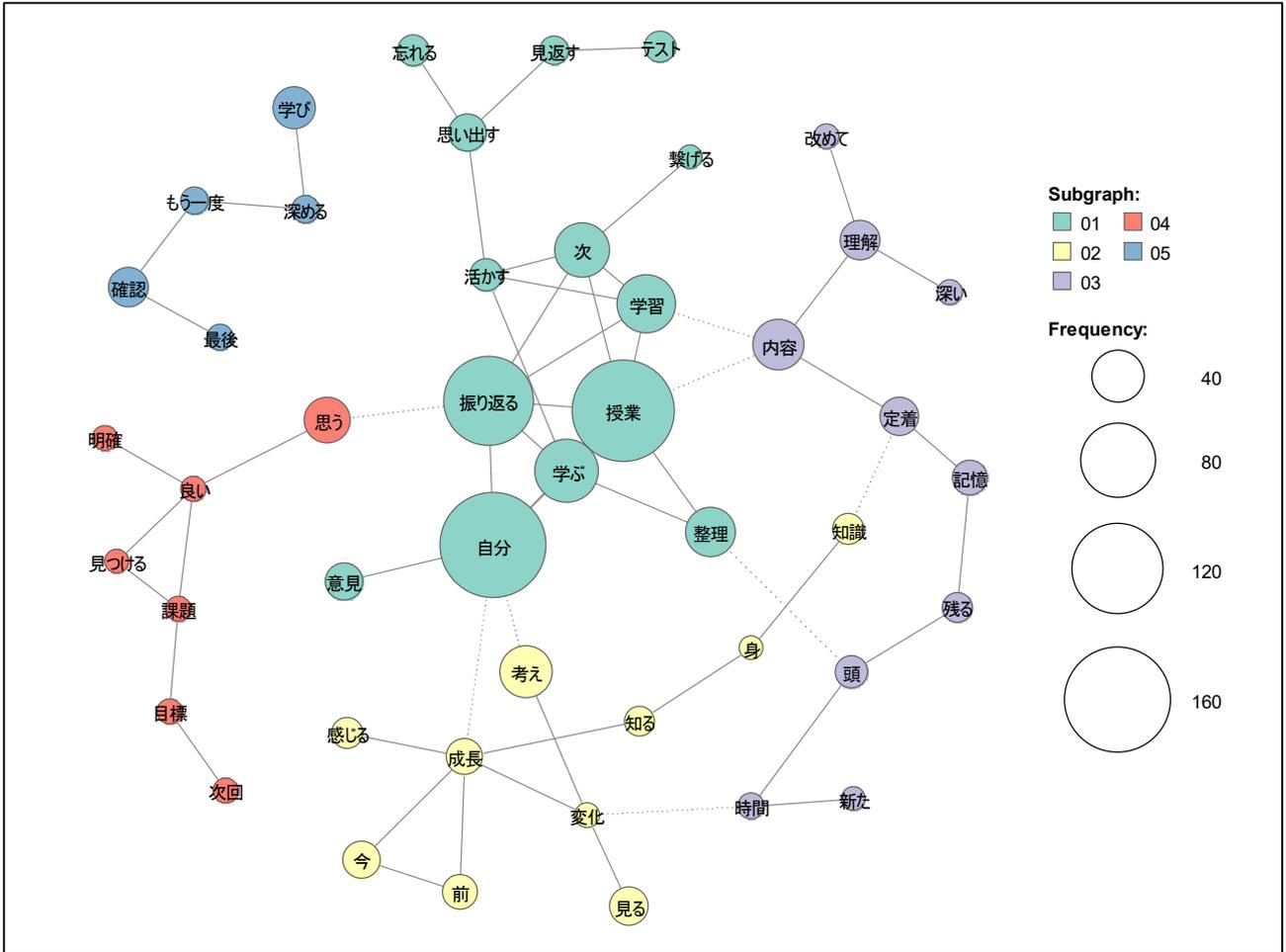
項目	令和3年度 平均（標準偏差）	令和4年度 平均（標準偏差）	t 値 p 値 (*<.05, **<.01)
chromebook の操作について(使いこなすことができるか)	3.17 (0.57)	3.24 (0.55)	1.20 _{n.s.}
②-1 提示される資料が分かりやすくなった	3.57 (0.64)	3.73 (0.50)	2.84**
②-2 個人の調べ学習が進めやすくなった	3.77 (0.59)	3.87 (0.42)	2.10*
②-3 様々なツールを使うことで深く考えられるようになった	3.41 (0.77)	3.55 (0.65)	2.03*
②-4 考えを級友や全体に伝えやすくなった	3.48 (0.72)	3.68 (0.57)	3.15**
②-5 意見交流がしやすくなった	3.42 (0.72)	3.64 (0.60)	3.44**
②-6 複数の考えを比較しやすくなった	3.59 (0.67)	3.76 (0.52)	2.95**
②-7 自身の学びを振り返りやすくなった	3.15 (0.92)	3.48 (0.73)	4.07**
②-8 級友の意見を参考にして、自分の考えを強化したり、修正したりしやすくなった	3.46 (0.73)	3.68 (0.56)	3.46**
②-9 意見をまとめたり、整理したりしやすくなった	3.47 (0.82)	3.73 (0.54)	3.84**
②-10 グループで一つの作業を同時に進めやすくなった	3.70 (0.65)	3.87 (0.40)	3.24**

t 値：2つの集団の平均値に、差があると言えるかを示す値。数値が高い方が良い。

p 値：算出された値が間違わない確率のようなもの。「n.s.」は良くない。「*」は良い。「**」はとても良い。

→p 値が 3.0 を超え、「**」が付いた項目が計 6 項目あり、ICT 活用が生徒の学習に効果的に働いたことが分かる。

⑤-2 (語の最小出現数8)「振り返りを行ったときに、良かったと思うことは何か」



→Subgraph01 や 03, 05 に見られるように、一単位時間の内容を整理することや、理解を深めることなどに有効だと感じている。また、Subgraph03 に見られるように、振り返りを行うことによって、次時の課題や目標を明らかにすることが可能となっている。さらに、Subgraph02 では、振り返りの蓄積によって、自身を客観視することが可能となり、成長を自認することができている。しかし、Subgraph01 に見られるように、振り返りをテスト前に行う学習と混在している者も見られる。

3 研究の成果と課題

○「個と協働の学びが響き合う」の定義の中で、「他者の考えと自分の考えとを組み合わせたりしながら、自分の考えを言語化し、精緻化している状態」としたが、その中にある「自分の考え」をつくる時間を確保することで、協働の学びを活性化させることにつなげることができていた。

→「話し合いをさせる前には自分の考えを作らせる」ことは、基礎的な指導技術の一環である。しかし、本研究においては、「自分の考え」を顕在化する場面としての「内化1」を明確に定義していたため、より有意義な協働の学びが促されたのではないかと。ただし、内化1を「コンフリクトによって…(中略)、課題に対して明確になってきた自分の考えを顕在化することである。」と定義したことについては、内化1が単なる問題解決の過程で自己の考えを顕在化することであるという狭い定義づけになっていることへの違和感を指摘されている。外化へと進む前段階として、内化1の段階で必要な教師の手だてを明らかにしていかなければならない。

○「個と協働の学びが響き合う」ために、議論を活性化させるための手だて（「教師の焦点化された発問」等）が今後も求められる。また、「個と協働の学びが響き合う」を「さらに、これまでの自分の考えからの変容を実感している状態までを含むものとする」と定義したが、自己の変容を時間させるために、各教科でリフレクションの場面での工夫があった。

→議論を活性化させるために、教師が比較や焦点化等の視点を明示する等の工夫が各教科で提案された。また、協働の学びを経て変容した自分の考えを「深い学び」へと導く過程において、自己の変容を明確に自覚させることは不可欠であった。ただし、リフレクションの在り方については議論の余地が残った。質の高いリフレクションを行うために、教師がどのように問い、何を書かせるのか。リフレクションは個々の生徒が記述をするだけで良いのか。今後も検証が必要である。

○議論を活性化させるICTの活用方法について、各教科で「他者の考えの可視化」「動画視聴の視点の明確化」「データの収納・整理」といった価値ある提案をすることができた。

→ICT活用については本校で2年間研究を続けてきたが、その集大成となる研究発表会となった。本校の提案は「ICTの使い方」ではなく、「目的に応じたICT活用の中で、教師が何をするのか」という点にある。生徒の考えを可視化させたときに教師がどのような発問を行うのか、動画を視聴させる際にどのような視点を与えたのか、議論を促すためのデータをどのように提示するか等、幅広く提案をした。今後もICT活用の最先端を進む学校であるためには、常に新しい情報を収集し、活用の幅を広げていく必要がある。また、議論を活性化させることにとどまらず、内化2や効果的なリフレクションを促すICTの活用方法についても提案する必要がある。

○（2023.03.15 追記）特に「意見交流」「学びの振り返り」「級友の意見から自分の考えを強化」「意見の整理」について、ICTの活用が有効だった。

→アンケート調査結果から、上記の四項目について、一定の成果が得られたことが分かる。その中でも、ロイノート・スクールやGoogle ジャムボードの活用が、話し合い際の意見を比較することや共有することに役立っていると感じている生徒が多いことが分かった。「学びの振り返り」についても効果が上がっていることが分かるが、「振り返り」のことをテスト前に行う学習と混在している生徒がいることなども分かっており、教師と生徒が「振り返り」を何のために、どのように行うものであるかについて共有できていないことが課題として挙げられる。

○（特別支援教育部）学習サイクルを設定することは、自立活動の指導の時間をどのように設定していくかで悩む先生方に向けた提案性のあるものであった。

→知的障害を有する生徒の自立活動に関する実践報告が全国的にも少ない中で、本校の研究報告はとても価値高いものである。「きづく」「やってみる」「つかむ」という段階を設定することで、自己の中心課題を自覚し、課題解決につながる活動を仕組むことができた。また、個々が異なる目標をもつ自立活動の時間の中にあえて協働の学びを仕組むことで、それが手だてとなり、有効に働いている場面を本時で示すことができた。また、デジタルポートフォリオの価値は一単位時間の中で限定して見とることは難しいが、家庭や異校種との連携にも活用することができる。生徒自身が中心課題を自覚するという「生徒のためのツール」であるだけでなく、「教師や周りの人のためのツール」としての価値も併せて伝えていくべきであろう。